

1周年のご挨拶

おかげさまで令和4年4月1日をもって開業1年となりました。開業当初は、コロナは一旦収まりつつあり、このまま終息するかにもみえましたが、まもなく大阪では最悪のアルファ株（英国株）による第4波を迎えました。このころはまだワクチンも一般接種が開始されておらず高齢者を中心に呼吸状態が悪化する人が多数でて病院は大混乱となっていました。第1-3波までの勤務医としてコロナ対応の経験があったこと、クリニックに発熱患者専用の隔離室を備えたこと、また重症化する人は高齢者などに限られていたことなどから、クリニックでは比較的落ち着いて発熱者の診療をしていました。しかし、基幹病院がコロナ対応で手一杯となり、増悪した患者の搬送先に困る事態となり不安を感じることもありました。

ほどなくワクチンの接種がはじまりました。当院は開業間もないため、ワクチンの配給の要望をなかなか受け付けてもらえず、ギリギリまで予定が組めないということもありました。医療機関の番号を知らせられるのが開業2日前、それが中央のシステムに認識されるのに2ヶ月ちかくかかるという平時モードで大変焦りました。当時、ワクチンの副反応は未知で、実際先行した医療従事者で若い人が気分不良でバタバタと倒れる事態を目の当たりにしていたため、クリニックでの接種に躊躇する気持ちもありました。しかし、副反応への対応なども勤務医時代に経験していたこともあり思い切って実施することにし、結果的にクリニックを認知してもらうことにつながりました。幸い高齢者にはそれほどの副反応は見られず、ワクチンの予約には大変苦労したものの、円滑に接種をすすめることができました。今から思えば、接種される側だけでなく、接種する側も極度に緊張していたため迷走神経反射などが頻発したのだと思います。

高齢者のワクチンがほぼ終了する時期からデルタ株（インド株）による第5波が襲来しました。感染力と毒力が明らかに上がっており、ワクチン未接種の40～50代の合併症のない人も肺炎をおこし次々と人工呼吸管理が必要となる事態となりました。私自身も年齢的に感染し重症化してもおかしくなかったためクリニックでの診療もより神経を使う状態でした。やがてワクチン接種がすすむにつれ急速に収束し10月から12月にかけては非常に落ち着いた状態となりました。mRNAワクチンという新しい技術をすぐに実用化する欧米の底力をみせつけられました。

令和4年1月中頃から第6波の発熱患者が急増しました。今回はオミクロン株（南アフリカ株）による流行で、肺炎をおこすことはまれでしたが、患者数が圧倒的に多く、発熱外来はパンク状態となりました。600名以上の方に検査を実施し、300名以上の陽性を診断しました。さらに3回目のワクチンの予約と接種開始が重なり、スタッフにも家庭内感染者がでるなど診療継続が危ぶまれることもありました。デルタ株のような自分が感染して重症化する怖さはほぼなく気分的には楽でしたが、PCR結果連絡だけでも連日1-2時間を要し肉体的には大変でした。また感染する怖さよりも、その後の社会的制約への怖さのほうが大きいという奇妙な状況になっていました。

コロナに翻弄された初年度でしたが、ワクチン接種などで早めに地域に認知されたことは当院にとってはよいことでした。初めての医療事務作業に、コロナの事務作業（これがしばしば変更され膨大です）も加わり大変でしたが、だいぶ慣れてきました。呼吸器内科で検索され、近隣以外からも患者様が来ていただき、来院患者数も少しずつ増えてきております。生活習慣病の管理も奥深いものがあり、常に最新の情報に基づき、患者様に最適な治療を提供できるようにしていきたいと考えています。コロナへの対応は続いています。健康寿命を伸ばすことがかかりつけ医の使命と心得え2年目以降も頑張っていく所存です。引き続きよろしく願い申し上げます。

令和4年4月 院長 北田 清悟